

colors

著者：生澤由一

## STORY

立花彩は、4年前に交通事故で目が不自由になって以来、

閉ざされた世界で生きる糧もなく、自分の存在を否定していた。

しかし、自分と同じように心や体に傷を持つ「仲間」と出逢い、

生活が少しずつ変わって行く。

そして、それぞれの居場所を見つけるため、みんなで PARTY を

行おうと計画する、、、。

どこかが欠落した若者たちが、生の躍動を自分らしく表現しよう

とする、鮮やかな日々を描く長編ストーリー

—colors—

—青春の「色彩」は、あなたの瞳にどう映っていますか？—

## 1. blind girl

—目覚めの春は来ない。—

雪溶けに咲いたフリーズが陽光に包まれた舗道の中、花束を片手に抱え私は歩いている。

まだちょっぴり肌寒い薫風を、その艶やかな肩までのびた髪は吸収し、微かに揺れる。

無造作に出来た日溜まりのエリアに入ると、季節の変わり目を感じる。

久し振りに晴れた午後の空気はいつもより澄んでるし、清らかで新鮮な気分になる。

木漏れ日から遠慮がちに顔を出す、六角形のシャインが眩しい::

::なんて、私を客観視する要素のひとつである’ 情景描写 ‘ ってヤツが出来ないのに、イメージで外界のシーンを膨らましてみる。

「きっとこうなんだろうな」って。

でもやっぱり途中で、かったるくなってやめる。

普通ならこの時期を、今イメージした通りリアルに感じるんだろう。

いや、ほとんどの人はそんなささいなコト見向きもしないし、当たり前のように自然に受け入れてしまって、まったく感じないのかもしれない。

ある意味、私みたいに。

ただホントに感じるのは、街路樹のざわめきがちょっとうるさいってコトと、今日も排気ガスの匂いがウザいってコト。

それにしても、ミズキがこの前買って来てくれたミュールってヤツは、まだ履き慣れてないためか歩きにくくてしょうがない。

パステルカラーって言ってたけど、どんな色だっけ、、、。

あれ以来、見てないから鮮明に思い出せない。

思い出すのは決まって一去年、世界は滅亡しなかった。—ってコト。

相変わらず閉ざされた風景は私を包み込み、怠惰な日々は流れて行く。

いっそのコト何もかも消えて無くなれば良かったのに、、、。

どうしようもなさが足取りを重くする。

空が笑っていても、泣いていても、私の世界にはカンケーない。

信号に差し掛かって足をとめる。

鈍いクラクションの音。雑踏にこうして佇む時、耳だけが頼りな私は鼓膜の尊さを知り、それと共に儂さも知る。

後ろから数人の子供のはしゃぎ声と、駆けて来る足音が聴こえた。

その無防備なスピード音が、私目がけて近づいて来る。

もう目の前！

もう気づいてよけようとしても遅いタイミングに入ったコトを察し、身構える！—けど、

突然の事態に対処し損ねて、私はよろけるように倒れた。

” カラン。 ”

花束が宙を、弧を描くように舞ったんだと想う。

「何やってんだよナオー。」

「ゴメンね、お姉ちゃん。大丈夫？」

すぐ後ろから友達か、複数の声変わりがまだの、あどけない声の集合体が聴こえる。きっとランドセルでも背負って、だらしない心配そうな表情で私を覗き込んでるんだろう。

「ハイ、これ。お姉ちゃんのもでしょ？」

私はゆっくり起き上がると、手探りで少年の声がする方へ手を伸ばした。

ぶつかった少年とその友達が、花束ともう一つの落とし物を、私の手元へ差し出してくれた。

「、、、ありがとう。」

沈黙の後、少年が私に尋ねて来た。

「お姉ちゃん、見えないの？」

きっと不思議そうな表情をしてるんだろう。別にそんなの伺うワケでもないけど、子供の発言は素直だ。見たコト、想ったコトをありのままに聴いて来る。

私はその素朴すぎる言葉にうなずき、微笑んだ後、気をつけてね！と、少年の頭を軽く叩いた。

その微笑みは、今じゃあまり聞かれないクエスチョンのお返し。

そして青に変わった横断歩道へと、私は吸い込まれていく。

左手には花束を抱えて。

右手には日射しで輝く、銀色の杖を当たり前のように動かしながら、、、。

それは8月の第2金曜日。蒸し暑い日だった。

今でも鮮明に憶えている。

受験勉強に嫌気を刺し、予備校の夏期講習をサボって、夏休みになってすぐに M でナンパされ、知り合った慶大生の夏目幸生の、海いこうよ。の TEL に、軽く OK した日の午後。

あの頃の私は初めての刺激ってヤツにハマってた。同じクラスで遊びに関しては私よりも経験豊富な川村美月と、幼馴染みで中学から隣の区の私立に行ってしまったけど、気が合って今でも仲の良い小林あずさと3人で、年を3つもゴマかして大学の新歓コンパ行ったり、デークラで軽い援交してオヤジを騙して遊んだり、クラブでルミカ振り回してオールしたり、Hello！から何時間も発たず性欲の導くままSEXしたり、POTを軽くキメたり、、、。

どれもが新鮮で、くだらない日常なんてブツ飛ぶような感覚で、中3の1学期は今思い出しても本当に刺激的な世界にいた。

色んな色が見えていた。

怖いモノなんてなかったのかも知れない。でも、友達と別れて部屋でひとりきりになった時の切なさたらなかったなあって思う。

昔から3人共、背が高かったせいもあり大人っぽく見られていた。

3人で水着を買いに渋谷に行った時なんて、化粧品のキャンペーンやってるコンパニオンに、'20才からの新美溶液' というアンケートを差し出され、「ウチらってそんなフケて見られんのかなー？」

って笑いつづけた。

笑顔が絶えなかった。そう、あの事件が起きるまでは、、、。

三宿の交差点にある Web の前でマルメンを2本吸い終わったトコで、246を右折して来たメタリックグリーン của サーフが反対車線に止まった。

ウィンドウが開いて褐色の笑顔を浮かべたユキオが手を振った。

第3京浜を風が吹き抜ける。天窗を少しだけ開けてるだけなのに、風の声はスゴイ。まるで自分の存在を主張して鳴いているよう。

CD のボリュームは19。ユキオの年と同じだなんて思った。

ハンドルを持つ手はしなやかに伸びて、うっすらと筋肉の張りが見える。

ひきしまった体。私は先週末、その体に包み込まれ2回もイッた。

逢うのはそれ以来だ。週2、3で海に行ってるという。

サーファーはなんでこんなにも太陽の恵みを一人占めしようと体を燃やすんだらう。

私はブギボ経験が2回だけ。それも今年から。はじめてやったのはアズサの家族と、ユキオと知り合うちょっと前くらいに行っ、レンタルで借りてやったけど上手く波に乗れず、筋肉痛になったっていう記憶しかない。

2回目はユキオに2週間くらい前に、ミズキとアズサと一緒に連れて行ってもらった。思った通り上達してなかった。

今回も前回同様、ユキオにブギボの板借りてやろうかと思ったけど、一度家に水着取り帰るのもタライし、私は波打ち際でユキオが波に乗ってる姿をまったり眺めてようと想った。今日は、いや、最近はそんな気分なのだ。

まあ、季節的にはちょっとはやい夏ボケ。そんな感じだらう。

「昨日の夜さーバイトで、朝から寝ずで海行く約束してたんだけど、ウチ帰って用意してたら知らないうちに寝ちゃって、気付いたら昼！電話の電源も知らないうちにオフでて超ー最悪！起きてソッコー後から合流するゴメン！ってベル入れて、でもオレ寂しがり屋じゃん。んで、彩誘った。

本当はオレの車にも乗るヤツいたんだけど、オレ寝てたから友達のクラウンにギュウギュウヤロー5人ツメこんで来たとかいって、スゲー悪いコトしたよー。でもウケるっしょ！」

黙っていればクールでかっこイイのに。心の中でそう想った。でもコイツのおしゃべりは時々気を紛らわせてくれる。切ない夜にTELで救われたコトもある。2、3回だけどね。SEXもそれくらい。バカそうだけど自分のネガティブな部分とか気にかけてくれる時、やさしい言葉選んでくれてんだなあって分かる。まあ、イチオー、ケイオー行ってるくらいだからね。イチローだけど。

「おい、ユキオ来たよ！」

「マジ遅ーよお前！何、オンナ連れ？」

仲間に手荒い歓迎を受けた後、私は紹介された。15に見えないのセリフはもう聞き飽きた。ユキオのSF？の質問に、手で大きく×を書いてNOと答えた。

あっ、でも別に付き合っていないしその通りか、なんて想ったりもした。

ユキオは笑っていた。グレイのウェットスーツに着替えた彼はロングボードを滑らせ、勢い良く水飛沫を上げると、午後の強い陽射しの中へ溶け込んで行った。

私は煙草に火をつけ、瞳を凝らし、水面に光るキラキラをずーっと眺めていた。そのキラキラはとでもキレイで、神様がくれた最後の贈り物だったのかもしれない。限り無く

透明に近いブルーは永遠を描いていた、、、。

その日の波はダブルオーバーで、サーファー達に愛されていた。

低気圧にふてくされないように、夏を満喫する風景はとても絵になる。

鮮やかな水彩画をイメージして寝転んだら、青空と雲の白とのアンサンブルが眩しすぎて笑顔が溢れた。久し振りに眺めた空は誇らし気に想えた。

ちょうどタバコが切れたところで、ユキオ達が海から出て来た。

「おーい、彩ー！」

私を見つけて微笑むユキオに小さく手を振った。ユキオは仲間からポカリを受け取って私の横に寝転んだ。

「上手いじゃんユキオ。」

「センキュ！今日の波は最高だね。知ってるか彩、海って何色か。」

「海の色？」、、、私は考えた。青か、水色か、透明か、白か、、、。

ポカリを一気に飲み干した後、ユキオは海を見てこう言った。

「海はな、その時によって色が違うんだ。朝の色、夕方の色、夜の色、夜明けの色、それから晴れた日の色、曇りの色、雨の色、、、オレはね、色んな色を持つてる海がこの世で一番好きなんだ。だって決まってないなんてスゲー自由じゃん！」

「ふーん、アンタらしいね。そういう発想嫌いじゃないよ。ねえ、目で見える物はちゃんと色があるけど私は何色なのかな？」

「彩ァ？んー何色なんだろうな。オレも何色だろう。ってゆーか、普通自分が何色なんだろうってあんま考えないだろう。好きな色でいいじゃん。」

「好きな色が自分の色か、、、。」

その後、日が沈むまで私達は海にいた。夕焼けを鮮明に映した海の色は、昼間とは全然違って見えた。そんなささいで当たり前な出来事を、素直に感動できる愚かさを、キレイに言うと素晴らしさと人は呼ぶんだろう。私も満更ではないと想った。

海から出てすぐにガストで夕食をとった後、ユキオの友達が気を利かせてくれて二人で帰りなつて。もちろん、遅刻の件もありユキオおごりだったけど。

仲間の一人のシンジと言うファインのモデルやってる男がイイ奴で、ユキオに何かされたらソッコー言いなよ。ウチらみんな彩ちゃんの味方だからって、人なつっこそうな顔で笑ってた。藤本真治はユキオの一番の親友らしい。

パッチリとした二重で、ホリの深いちょいハーフ顔。でも笑顔を作るとまだ少年の無

邪気さが残ってて、どこか憎めない感じがした。

インターまではユキオに着いてくわ。というコトで、駐車場を出て後ろにクラウンと、2台前後に並んで海岸線を帰路へと向かって走り出した。

時計を見ると午後8時をまわったところ。辺りはもう暗くなってる。ガストで2時間くらいまったりしてたことになる。

ユキオのCDからは懐しのSEPTEMBERが流れている。クラウンからは冷やかしの意味を込め、パッシング攻撃が止まない。

ユキオはまったくアイツら。と言ってハザードで返す。そんなやりとりも10分もすれば飽き、信号待ちでバックミラーを見るともう2、3人おやすみモードに入ってた。シンジは明るく手を振ってる。

「まったくアイツらがキダろ彩。今日は疲れなかったか？」

「うん。楽しかったよ。また連れてってよ。今度はさ、私もサーフィンやりたいな。教えてよ。」

OK と言って私の手をユキオは優しく握りしめた。私は黙って窓の外の景色を眺めてた。ほんの少し握り返した後に。

夜の海の色は真っ暗で怖い。ずーっと見てると吸い込まれそう。せめて月でも出ればなあと思った。夜になって急に雲が増えた。星の出番もない。対向車のヘッドライトだけが明かりを連れて来る。刹那、、、。

四駆だとたいいの車は見下ろせるから強くなった気分になる。

「おまえさー受験生じゃん。予備校とかいいの？今日とか親心配しねー？」

いきなり何を聞いてくるんだろうと思った。再び現実に戻された気分。ちょっと不機嫌そうな声でそんなコトどーでもいいじゃん。と言った。ユキオは、

「いやさー、何でオレと逢ってくれんのかなーと想ってさー。オレは彩のコト好きだから逢いたいんだけど、彩はどう想ってんのかなって。今までアイマイだったけど彩さえ良けりゃ、付き合わねー？」

「自分が何色か分かったらね。」

「何だそりゃ？」

「今日海は自由な色だってユキオが教えてくれたじゃん。私もそう想った。」

私も何か今よりもっと自由になりたいんだ。そのためには自分が何色か知らなくちゃいけないような気がして。」

「それとこれとはカンケーねーじゃん。何、彩はオレとは付き合いたくないワケ？」



「うーん、カンケーあるかな。まあ、カレシとかカノジョとかそういうのはまた後で。今は自由にやりたいの。ユキオのコトは私も好きだよ。」  
「変なの。んじゃ、オレが彩が何色なのか見つけてやるよ。」  
「私もこれから見つけてみる。これからもよろしくね。」  
「おまえってホント変なの、、、。まっ、いっか。」

—そんな会話が終わった直後、次の右カーブに差し掛かった途端の出来事だった。それはとても眩しい光で私達の前に立ちはだかった。ほんの一瞬の出来事。目の前が光に包まれたとほぼ同時に、凄まじい衝撃音が鼓膜に響く。ブレーキを踏む音だと判断した直後の展開は、何が何だかわけがわからない状態で、気付いたらフロントガラスが砕け散り私の視界を塞いだ。

次の過程で急ブレーキのショックで前のめりになり、そのままうずくまってしまった。クライ、、、目の前が何も見えない！  
全身に痛みが走る感覚さえ鈍く感じ、何が起こったのか冷静になろうとすればする程、暗闇が私を支配して思考回路をパニックらせる。

ユキオは、ユキオはどうしたの？ユキオ！ユキオー！  
声にならない叫びを何度も繰り返した。覚束なかった意識がだんだん回復して来ると、目に細い針で刺されたような痛みを覚えた。そして、目が開けられないコトに気づく。それと同時に最後に見た光は、対向車のヘッドライトだとも気づく。ライトは一つだったという記憶から察するとバイクだ。

バイクがカーブで突っ込んで来たんだ！クラッシュしたんだ！  
コウツウジコ？  
暗闇の恐怖とどうなってしまうんだろうという不安で私はただ震えていた。  
「ユ、ユキオー、、、。」

精一杯の声を振り絞った。返事がない。気を失っているのか。もしかして意識不明の重体なのか。ユキオは私みたいにシートベルトをしていたっけ？  
体を起こそうにも今頃になってやって来た激痛で身動きがとれない。  
それにしても、メガイタイ、、、メガイタイ！  
嗅覚はまともだった。焦げた OIL の臭いだけが敏感に鼻につく。  
視界が塞がれてる今、妙に事故現場が生々しく想えて来た。  
「ユキオー、大丈夫かー！彩ちゃん、彩ちゃん！」  
シンジの声だ。やけにあたたかく感じるその声。私は戻りかけてた意識が再び薄れて

いくのを感じた。

「おいッ！彩ちゃんは無事だぞ！」

「彩ちゃん、聴こえるか、彩ちゃん、彩ちゃん、、、。」

—悪い夢でも視てるようだった。

でも、意識が回復してからもその悪夢は醒めなかった。

病院で医者にも包帯を取ってもらって、目を開けても私の瞳に映る光景は、あの時最後に見た夜の海の色が広がるだけだった。—

## 2. meet again

盲目の世界が私に降り注いでから4年の月日が流れた。

あの当時はひどいモンだった。網膜剥離と診断されてからの周囲の変わり様。

まるで私を忌み嫌うようにわざとらしく、近寄りがたく接してくれる。

退廃的な性格に拍車をかけるような外の世界の住人の態度にはゲロが出る。

そんな生活にウンザリして、中学は中退。高校は通信教育で卒業にまで至ったけど、孤独の気楽さがもたらした安易な結果に過ぎない。世間体と言うなればそれまでだけど、親はかなりの喜びを表現してたと想う。別にカンケーないけどね。

でもこれからは、家事手伝いと言う肩書きだけ利用して、自由にやってくつもり。今に至るまでホントに色々あったけどね。

それにしても同情を両手で抱えた人達ったらなかったなあ。まあ、おかげで友達は厳選されたけど。杖をつく生活になる前と同じように、ミズキとアズサとシンジだけは変わらず接してくれる。

ミズキは高校を卒業するとやりたかった歌を目指し、昼間はボイトレやレッスンに通い、夜は6でホステスをやってる。6ってゆーのはウチら用語で六本木のコト。1〜10まで創った。

アズサはこの春から短大生。その長身を生かして高校の頃から読者モデルをやり、今じゃ立派なJJモデル。でも最近元気ないみたい。

シンジは1年くらい前からミズキと付き合っ、今はCOREと言うCLUBでバーテンをやりながら、ダンスを頑張ってる最中。サーフィンたまに行く程度みたい。あの事件があっからしばらくは仲間内で行くのを止めてたらしいんだけど、やっぱり海も好きだからって。前よりは行く回数減ったらしいけど。

そして、ユキオは—

あの交通事故以来目を覚まさない。

私の目は起きてるけど視えない。ユキオは目が見えるけど起きない。ショックによる一種の植物状態だそうだ。

あの時、あの海で私は視界を、ユキオは意識を失った。

事故を起こしたバイクに乗った青年は、ユキオと同じく意識不明の重体で病院に運ばれたが、その後の回復状況や容態などは知らない。別に知りたくもない。事故を起こ

した原因は、カーブを曲がる際のハンドル操作の過ちらしい。

ユキオは4年間眠ったままだ。事故る最後の会話を覚えている。

私は今も自分の色を見つけられないままにいる、、、。

いや、むしろもう決まっているのに認めたくないだけなのかもしれない。

—black—

私が視えてる色はそれ一色。

視力回復のリハビリは嫌っていう程やって来た。鉄分に舐まれる体になっても、体が重くなる感覚だけ残し、意味のない結果を披露される。そこには拍手や賛美歌などない。あるのはどうしようもなさ、もどかしさ、やるせなさ、儂さ、苛立ち、憤り、虚無感、空疎感、絶望、失望 etc、、、。

哀れみの言葉はウザすぎて鳥肌がたつ。みんな偽善と言うペルソナを被り、私に接するコトによって一種の優越感を覚える。ハンデを背負って生きて来たこれまでとこれからは何も変わらない。何も生まれない。そう想っていた。

トーヤと出逢うまでは、、、。

遊歩道あたりに差し掛かって立ち止まり、タバコを取り出して最後の1本に火を付けた。煙が低い空へと昇華されてくイメージ。

そして再び歩き出そうとした時、お気に入りの GTS の「 through the fire 」の着メロが鳴り響いた。

視覚を奪われた私は、味覚や嗅覚でモノを楽しむコトよりも、聴覚で感じ取る楽しさを追求して来た。

素直に音楽が好きになり、ジャンル別に良さを発見し、こだわりを持って聴ける耳を得た。ルーツ系の R&B から入って、HIP HOP 色が強くなったメアリー J からの流れのソウルを聴き込んだ後、ジャズも全般に試聴し、それからテクノ、ドラムンベースと来て、私の求める音楽性は、ハウスに落ち着いた。

それも歌モノのガラージュ系。でも UK ハードハウス、ワープハウスの流れで、ニューエナジーやトランス寄りの音も悪くはない。まー聴いてもトランスはプログレ、エピック止まりだけど。サイケデリックトランスやゴアトランスは、食わず嫌いって感じかな。でもちょっと怖いイメージもある。基本的には4つ打ちのリズムがやっぱり最近じゃ好んで良く聴く。

さすがにミズキみたくパラパラはNO THANKYOU って感じだけど。この前ミズキに、日本独自のサブカルチャーであるパラパラはサイコー！って熱く語られた。TWIN に毎週火曜必ず通ってるらしく、最新パラビ GET した！ってよろこんでた。

ミズキが言うに、パラパラの次はフラメンゴの手拍子を取り入れたフラメンゴパラパラ、略してフラパラが来るらしい。バラをくわえて踊るんだって。

まー結局のトコ私は、BPM が120くらいの曲がジャンルを問わず、私の体質に合うんだなと言う結論に達した。パラパラってゆーか、ユーロ系もビミョーに含みで。

「もしー、彩ー！」

その聴き慣れた柔らかい声の持ち主はミズキだった。

「ねー聴いて彩ー、さっきねーミレニウムディーヴァの書類審査の結果が届いて受かったのー！ 今月末2次審査決まった！ 超うれしー！！」

「良かったじゃんミズキ！ おめでとー！」

ミレニウムディーヴァとは2000年最初の歌姫を発掘するというコンセプトで、大手のレコード会社とその手の代理店と手を組んで、全マスコミ、メディアを通じて大々的に宣伝してるオーディションらしい。

見事歌姫に選ばれたシンガーは、大物プロデューサーの下、即 CD デビューが決定され、夏の沖縄旅行の CM のタイアップに起用される他、賞金2000万が得られるビッグプロジェクトで倍率は過去最高の数字とも言われてるって。

「課題曲はコヤナギに決まったからもうこれから毎日歌いまくり。ねえ、彩今日ヒマしてたらアズサも誘って3人でカラオケ行こうよー！ 今ドコお？」

「うーん、今5。ユキオのお見舞い行くトコなんだ。そう、だから帰る頃 TEL するよ。うん。また後でね。でもマジおめでとッ！ うん、じゃね。」

ウチら用語で1はブクロ。2はシンジユク。3はハラジユク。4はシヴヤ。5はアザヴ近辺。6はロツポンギ。7はギンザ。8はリンカイ。9はヨコハマで0は自宅。一時期シークレットワードがハヤッて色々3人で考えてた。

別に誰に居場所を隠すワケじゃないんだけどね。

やっと T 大病院に着いた。視覚が頼りにならない今となつては、意識をそれ以外に集中させて歩くと言う作業が非常に疲れる。自宅からのこの道のり、通い慣れたと言っても相当の時間が失われる。エレベーターに乗り込み息をひとつ、長く吐く。チーン。東病棟3F の308号室。

病室に入り、ベッドの傍らにある折り畳み椅子に腰掛けると杖を置き、ゆっくりその手を探った。そしてユキオの頬に到着すると優しく、緩やかに撫でた。

「ユキオ、元気してた？」

返事がない。しばらくユキオに触れたままで、私はミズキに訪れた良いニュース、さっき転んだこと、今日感じてる気温、天候等を話した。

その後、花瓶に飾ってある花の匂いを嗅ぎ、洗面所で水を入れ替え、今日買って来た新しい花と取り替えた。

「今日はね、カラーの花なんだよ。カラーは茎が太くてしっかりしてて何かね、男らしいって感じ。分かる？」

事故以来私は、一人で街を出歩けるようになってから1週間に2回は必ずと言っていい程ユキオのお見舞いに来ている。ここに来るとなぜだか気分が落ち着く。いつしかここが、自分にとって一番安らげる空間になっていた。

前向きに生きるってどうすればいいんだろう。

前向きじゃなくても自分らしく生きればそれでいい？

じゃあ、自分らしさって？、、、疑問符が並ぶばかり。

ミズキは Misia みたいなシンガーになりたくて、アズサはショーモデルになりたくて、シンジは今じゃダンサーの夢を持ってる。ハウスとカポエラを MIX させたダンスの確立を目指してるんだって。

みんなそれぞれレッスンしたり、努力ってモンをしてる。

夢に向かって頑張る、そのひたむきさが自分らしさに繋がる。その過程でくじけたり、つまずいたり、でも決して妥協せずに、あきらめないって言う経験が自分らしさに磨きをかける。

暗闇しか見えない私にとって、そういうのって眩しすぎる。キレイすぎる。

だから応援する。せめて共感したい。

一緒によろこんで、一緒に悔しがる。でもそれで私は満たされてるの？

これって私が最も嫌いな偽善者ってヤツなの？

ホントはみんなが羨ましいと想ってる。心のどこかで妬んでる。最近こんなコトばかり考えてる。そして決まって行き着く先は自己嫌悪、、、。

ユキオは知り合った頃言ってた。絶対プロのサーファーになって世界中の海を制覇するんだって。今も、今もユキオは眠りの中そう想ってんのかな、、、。

私は静かにユキオの手を握り、これからの自分の予想図を何枚も何枚も頭でスケッチした。でも出口のない闇は依然、光を連れて来ない。

半開きの窓からは風が穏やかに入って来て、レースのカーテンを泳がせていた。そんなイメージの中、私はまどろみの深くへ沈んで行った。

いつの間にか寝てしまっていた。壁に立て掛けてあった杖が倒れた音で目が覚める。今何時だろ？

倒れた杖を支えにして起き上がり、廊下に出るといつもの看護婦に声をかけられた。

「あら立花さん、こんにちは。さっき眠ってたでしょう。」

「うん。あ、ねえ今何時ですか？」

「もう5時よ。これから夏目さんとか、患者さんの干してたパジャマ屋上に取り込みに行くの。」

「あー、私もタバコ吸いたいんで一緒行きます。」

私は看護婦と一緒にエレベーターに乗った。アクビをし終えたところで屋上に着いた。空気が澄んで寝起きにはとても心地良く感じた。

看護婦がシーツや、衣類を物干から取り込む音が聴こえる。きっともう太陽は傾き、ビル群に緩やかにダイブする時間帯なんだろう。情景描写が整った後、イメージしてみた。けどすぐにそれは意味ないコトだからやめた。

リュックの中を手探りするとマルメンの空箱に気付く。そっか、さっきのでラスイチだったんだ。面倒臭いけど売店まで買いに行こうと想い、杖の向きを変えようとした。とその時、聴き覚えのあるメロディーが耳に流れて来た。

through the fire だ！

あっ、この感じ、、、前もどこかで感じたような、、、。

激しいデジャヴに捕われた。誘われるまま誰かが奏でるその口笛の方へ向けて、杖を改めて方向転換し歩み寄った。行く手を遮るモノなど何もなかった。

そのメロディーが近くなったところで、奇妙な出来事が起きた。

私の携帯が呼応するかのように響き出した。

4小節遅れくらいで流れる着メロと口笛が偶然にも同じ曲を鳴らしてる。

「何だ？」男の低い声がした。

それと同時に、偶然起きた不器用なハーモニーは終わりを告げた。

動揺しながらも携帯を取り出し、あたかも冷静を装うかのように、一瞬間を空けてもしもし、と出た。ミズキだった。アズサと今一緒に4にいるからあとどれくらいで来れる？の

問いかけに、1時間くらい。と答え、待ち合わせ場所を聞いてすぐ、あとでまたかけるよ、ゴメンね。と言って切った。

携帯のオフを押した後、さっきのメロディーを口ずさんでいた人物は誰なんだろうと気になり、沈黙した空気を破ろうと何か言葉を選んでる私がいた。

しかし相手に先を越された。

「こんな偶然あるんだね。君も through the fire 好きなの？」

どうやらお互い興味を持ったらしい。私は軽くなずくと、あなたも？と聞き返した。

「オレは原曲のチャカカーンの方が好き。ハウスにリミックスされたヤツも悪くないけど、やっぱり名曲は時が流れてもカバーされたり、何らかの形で次の世代のリスナー達に受け継がれて行くモンだね。」

音楽雑誌の解説みたいなコメントが返って来た。その喋りから、ちょっとはカジッてるな感的匂いを感じた。しかしホントに奇妙な出来事だったなと改めて思った。落ち着きを取り戻し、今度は私が訪ねた。

「あなたはここに入院してるの？」

「通院。君は、、、目が不自由なのかい？」

「だいぶ前に事故に遭ってね、それから目が視えないんだ。」

「そっか、じゃあオレと一緒に。手を借して。」

何だろう？一瞬躊躇したが、私はゆっくりと手を伸ばした。

すると男がその手を優しく掴み、ほら触ってみて。と導いた。

その先で感じた手触りは、私がいつも生活に欠かせないこの杖とまったく同じモノだった。同じステンレス製。

「君に杖が必要なように、オレには車椅子が必要なんだ。」

私は戸惑った。

視界が閉ざされてから、生活に支障がある自分と同じような境遇の相手と触れ合うのははじめてだったから。

だいぶ前にボランティアの集会には一度だけ顔を出したコトがある。

でも自分と同じような同種と接したら、共感出来るモンは苦労や日常のささいなよろこびしかない。よろこびなんてモンも、健常者がごく当たり前に感じてるようなコト。何だか鏡に映った惨めな自分をイメージしてしまって、ボランティアの誘いに行ったのはそれっきりだ。

本当は否定出来ない現実と向き合い、認めるのが嫌だっただけなのかも知れない。

「下半身不随。オレも昔事故でこんなふうになったんだ。それからは、車椅子が無いと



日常生活がまともに送れない。でも、もう慣れたけどね。」

そう言ってるその男はどんな表情をしてるのか気になった。

「オレ、向井冬哉。トーヤでいいよ。君は？」

「彩、立花彩。」

「アヤってどのアヤ？」

「彩るの彩。」

私は指で自分の文字をなぞってみせた。

「ふーん、いい名前だね。どうしてここにいるの？」

「、、、友達のお見舞い。あ、ねえタバコ持ってない？切らしちゃって。」

「KOOLで良ければ。」

ちょっと待ってての声の後、私の右手にタバコが差し出された。

ありがとう、と口にすると、肺にニコチンを循環させた。煙が薄紫の空へと緩やかに昇って行くイメージをした。そして私達はしばし夕陽を見送っていた。

私はイメージの中、堕ちていく夕陽を、、、

「ねえ、歩けないってツライ？」

私はポツリと呟いた。

トーヤは夕陽に目掛け煙を流した後、火を消し私の横顔を覗き込んだ。

周りの空気の流れと気配で何となくわかる。

夕映えに鮮やかに染まる輪郭はきつと、喋り方から察するとシャープで、唇は薄い方、そしてどこことなく儂気で美しさと脆さを同居させてるかのようには私はトーヤをイメージした。

「全然一つて言ったらウソになるけど、音楽と出逢う前はかなり自閉的だったなあ。オレ今 DJ やってんだ。ネタはサイケ全般。アンビも好んでマワすけど。足動かなくても DJ やんのに影響ないからね。」

「アンビ？」

「うん。ヒーリングやリラクゼーション効果がある、まー一種の環境音楽。癒されるよ。」

この人は強い人だ。音楽をやり始めてから、自分の欠落した部分を原因に決して卑屈にならないで生きている。

会話からこんなにも相手のメンタルな部分が鮮明に伝わるのなんてはじめての体験かも知れない。

「そうなんだ。」

「そっ。怖いコトなんてないよ。やりたいコトやってんだもん。他のヤツらと同じように生き

てんだから、どうせなら楽しいコトしないと。」

他のヤツら、とは健常者のコトを指しているんだろう。私は、自分にはない前向きさを持つトーヤに、緩やかに魅かれて行くのを否定できずに佇んでいた。

「彩はどんなの聴くの？ やっぱハウス？」

「うん。でも最近はテクノとかドラムンベースも聴くかな。歌モノじゃないのも好きだよ。」

「へー、たとえばどんなの？」

「今部屋のCDにセットされてんのがGTS、SQUARE PUSHER、HEX HECTOR、SWEET BOXでしょ、えーっと、あとトランスっぽいのも一枚ある、えっと、、、何だっけ、あっ、そうTalvin Singh！」

「OK！」

「そう！」

「オレもあのアルバム超好き。特に7曲目！あの沖縄民謡をさ、スゲーイカしたリミックスしてるヤツ。いいよねー！サイケは聴かないの？」

トーヤの好奇心が伝わってくる。

「うん、食わず嫌いってヤツかな。サイケってあんまどんなのかわかんないし、何かトランスって聴いててどれも同じように聴こえるんだよね。」

「そっか。サイケデリクトランスはね、世界で一番ヤバくて、サイコーの音楽だよ。そこには壮大なストーリー性が存在してて、高音と低音のひとつひとつが連なってんだ。そして盛り上がりんトコで大きく、ひとつに結びつくシーンがあんだ。：音が巡り逢う場所：って言うのかな。その瞬間、嵐を潰したようないくつもの音が、天から一気に降りて来て、ウマク全身で掴むと、何てゆーかサイコーの気分が味わえる！俗に言う：音トビ：ってヤツだけど体験したことある？」

無邪気な少年のような語り口調で、トーヤは幸せそうに攻撃する。

いつもは外界からの攻撃を防ぐため、バリアを張ったり、セキュリティを立てたり、自分をプロテクトしたりするけど、彼の前ではそんなの必要ないのだと直感した。私はバリアを解いて一歩踏み出す。

「音トビってドラッグか何かで？トーヤはキメるの？」

私は素朴なクエスチョンをした。

「ご想像にお任せします。彩は？」

「えっ、私は・・・昔、ちょっとね。でも目が視えなくなっからは、友達にも危ないからって止められてもう4年くらいはゴブサタだな。」

「ふーん。」

「友達はたまに POT とか吸うけど。」

「ケミ系は？」

「何それ？」

「まーいいや。でも、ドラッグなんかやんなくなつて、意識を音に集中させると今まで見えなかったモンが視える時もあるよ。彩は普段、暗い世界しか見えてないけど、いつかきっと、何か違うモンが視えるかもね。」

そんな風に言われても不思議と腹はたたなかった。それって幻覚？と聞くと、  
「そーかもね。」ってトーヤは笑った。

それから生まれたばかりの淡い情熱を弾かせるかのように、私達は音楽の話で盛り上がった。ドラッグについて。そしてスペインのイビザ島から発信したトランスと、インドのゴアから発信したトランスのルーツの違いについて。

でもトーヤの話で一番興味深かったのは、RAVE について。RAVE って世界で一番ヤバくて素晴らしい大人の遊びらしい。要するに野外でやるクラブイベントのコトらしいんだけど、とにかくスゴイって。

3の代々木公園でたまにやってる小規模なのとは比べモンにならない程。去年の秋に八ヶ岳で行われた、EQUINOX って言う RAVE についてトーヤは話してくれた。  
「先輩に連れられて、ゴアな格好して行ったんだ。会場が牧場や草原を自然のフロアーと変化させてさ、コンテナで運んで来た巨大なスピーカー、スクリーンを設置して、DJ ブースと VJ ブースを作る。んで全国からトランス好きの RAVER が集まって来て、一日中音を止めずに、RAVE がはじまるんだ。」

ロケーションも良くて、空にはディズニーランドのシンデレラ城を照らしてるライティングが何灯もグルグル回ってて、レーザー光線、ブラックライトで光るオブジェクトも妖しく輝いてて、空気も澄んでてウマイし、深呼吸する度自然を感じる。そんな環境の中で昼までみんなで踊り狂うあの心地良さ。

音、映像、照明、演出、すべてにおいてクオリティー高くて、コアタイムには花火がバンバン上がって、8000 人の RAVER が一体になってた。

もうホント、サイコーの世界を肌で吸収して来たよ！」

トーヤの話は私の想像力を膨らましてくれる。イメージの域ってのがもしあるなら、それすらも越えて言葉のひとつひとつがピュアに伝わって来る。

目が視えなくなってから出逢った人の前で、はじめて私は心から笑った。

お互いの持つ傷の舐め合いじゃなく、呆れるくらい素朴な会話のやりとり。

最後にふと呟いた、トーヤのDJになりたいと言う夢を、私は素直に応援したいと思った。

私と2つしか違わないのにトーヤの言葉には安らかな説得力があり、またそれを実現するだろうパワーを感じた。

視界からの情報はフィルターが掛かってて不確かだけど、声や音から伝わる鼓動に似たモノは、かけがえのなさが宿る。自分が障害者だと言うコトを忘れて、トーヤとの時間に夢中になってた。

絶え間ないトークは幼い星を目覚めさせるまで続いた、、、。

月1でココの病院に通院してるコトを聞いた。その時お見舞いを兼ねてまた逢おう。と告げた、別れ際のトーヤの笑顔イメージした。

そこにはわざとらしい優しさなどない、あたたかな笑顔が私に向けられていた。なんて、イメージの自由を膨らます。そして、シンクロ、、、。

トーヤのパワーに同調できたら、自分も強くなれる。そんな気がした。

夜は遅れてミズキとアズサと4のカラ館で合流。ミズキのコヤナギを3回聴いた。::あなたの KISS を数えましょうー::

その後他愛もないオシャベリをして、マックでてりやき食べて帰った。

部屋に戻って来て、一服しながら through the fire を聴いた。

吸い終わるとベッドに倒れ込んだ。流れて来るメロディーは心地良かった。

リピートで何回も聴いた。口ずさんだ。両手を伸ばした。今日は疲れた。

今日を振り返った。今度トランス聴こうと思った。そして知らない間に眠った、、、。

その夜、夢を見た。

背が半分になってる夢。隣にはトーヤが無邪気に笑ってた。

その高さから見た景色は何だかキレイだった。

キラキラ六角形のシャインがリアルに輝いてた。

このまま永遠に目が覚めなきゃいいのに、、、。

週末の街は騒音と喧噪と混沌が支配する。

三権分立のように目に視えないピラミッドの攻撃は鳴り止まない。その中心に立っても、入って来るのはノイズ以外何モノでもない。敏感に発達した聴覚は、ささいな音も拾って来る。

雑踏の鈍い音、すれ違う人のカカトの音、アスファルトの軋む音、車のクラクションにスピーカーからのくだらないメッセージ、、、。

そのどれもがウザすぎて、吸収するたび疲れてしまうから、自然に耳に入って来たのを自然に流し出すだけ。

それらを別に吐き出すコトはしない。溢れるノイズの中、私はミズキとアズサに連れられ進んで行く。4の駅前を抜けると私達はタクシーに乗り込んだ。

「6ーってゆーかロツポングー。」

ミズキが運転手に告げるとタクシーは六本木通りへ向かい走り出した。

ミズキはマルキューのカパルアで買ったプッチ風のキャミがかなり気に入ったらしく、袋から取り出し、コレマジイよねーってよろこんでる。

プッチ風ってヤツがどんなのか説明してもらったけど、ワケわかんなかった。

「あとコレ。お店のパーティーの時着るドレス。これもね、なかなかイイ感じ！」

彩に選んであげたカットソーも私的にはかなりイケてるよ。ねーアズサ！」

「うん。アレかわいかったね。彩に似合うよ。」

「ありがと！」

目が不自由になって中学をやめた頃くらいから、ミズキとアズサが服をチョイスしてくれる。自然に、あまりハデなのじゃないのにしてもらったりとか、理解してくれてるから2人のセンスに任せれば安心して着れる。

ギャル系って口で説明されて、そのショップや、素材、質感を自分なりにイメージするけど、コレもやっぱりワケわかんない。

実際に私くらいの年のイケてる子はどんな格好してるか見てみたいって気持ちはやはり今でもある。

特にミズキとアズサはそこらへんウルサイから見てみたい。でも何となく手触りでわかるようにはなったけどね。

髪型やメイクとかも、私に似合うって言うのを前提に色々お任せ状態。

今日も遊び行く前、ウチに来てくれてメイクしてもらった。

これからシンジがバイトしてる6の CORE に遊びに行くトコ。

今夜は最近サイケで有名な「キリーク」ってイベントの PARTY があるらしく、シンジがゲストで入れてくれるから！ってミズキの誘いに OK した。彩と CLUB 行くの久々だから超うれしー！って受話器越し叫んでた。

でもホントに CLUB 行くのは久々。

しかも3人共モロサイケってゆーノリは今までなかったから新鮮。

今年のはじめに CODE のハードハウスイベントに行ったけど、酔っぱらったリーマンがウザくて、散々な目に合って以来しばらくパスしてた。

冬だったってコトもあるし、出歩くの寒いし。

でもなぜだろう、今回はノリ気な私がいる。

きっとトーヤと出逢って、感化されたから？どーでもイイけど、久しぶりの CLUB だし、しかもトランス初体験だし、大音量で音が聴けるのが楽しみだった。

「ねーアズさん、このフライヤーヤバいね。超サイケ！シンジが言ってたけど、この DJ 最近有名なんだって。」

「へー、あっ、もうこの辺じゃない、運転手さんココで、ハイ。」

外苑東通りを右折して am.pm の前で私達はタクシーを降りると、CORE へと向かった。ラード臭い人ゴミの中に吸い込まれるイメージで。

「ちょっとはやかっただかなー。」

「もうちょっとまったりしてから来れば良かったかもね。」

「ねえ、アズサ今何時？」

「うーんとねえ、11時15分。」

「イんじゃない。どーしよー、ノコノコ入れてから行こーか！？」

「どっちでもイイよ。」

「んじゃ入る前に食っちゃおー！」

CORE の近くの路地裏に腰掛けて私達は、マジックマッシュ1パケ2、5g を3等分して食べた。乾燥してるアムス産のキノコ、本数にして7、8本。

「このね、青いトコが一番成分あんだって。ヘッド苦いねー！」

ミズキの友達の彼氏がジャンキーで、トランスの PARTY 行くとって言ったら、:初心者用ギフトだよ、楽しんできな！:って持たせてくれたらしい。

しかもそいつは自宅でキノコ栽培してる公務員らしい。

市場で出回ってるマジックマッシュは、略して MM、M2 等と呼ばれてて、大きく分け

ると、今食べたアムステルダム産、ハワイアン、メキシカン、北海道の道産モノと色々あって、そのすべてが合法ってんだからおかしな話。

天然でキノコははじめて試す。30分後位で消化されて、効き目や持続性は人それぞれで体質によるモンだって、さっきマルキュー2のマックでミズキがうんちく語ってた。

「なんかこーゆーの久々でワクワクするね！」

「ウチらもまだまだ若いっしょ！」

私の目が見えなくなっからはじめてのコトだ。

危ないからって理由で、ドラッグは当たり前だけど NG になってた。

それからは私も心配かけると悪いと想って、あまりドラッグに関心を示さないで来た。

2人もおのずと私の前では、そのコトはタブーなんだと、自然に言い聞かせて来たのかも知れない。

その反動か、怠惰な毎日で、ホントは刺激に飢えてた。

でも今夜に限り、危険解禁。

2人の合意のもとで、一緒なら安心してキマれる。何か変な気分。

アズサが自販で DA.KA.RA を買って来てくれて、みんなで回し苦味を潤わせて一服した後、動き出した。

「お世話になります。」

私はミズキとアズサに笑いかけた。

B2までの長い階段をミズキとアズサの手に導かれながらゆっくり降りてく。

「いっつもココ来るたび思うんだけど、これって絶対地下2F 以上あるよねー。」

ミズキがハスキーな声で文句を言う。

前に2人のコトを、盲導犬的なノリでモードージンと名付けはしゃいでた。

それモード系入っててやだー！って笑ってたけど、こんな頼れるモードージンは他にはいない。安心して身を委ねられる。

エントランスに近づくにつれて、4つ打ちのリズムが聴こえて来る。良く耳を澄ますと、いつものハウスのノリとは違う、太くて重いけど、どこことなく斬新な音。私の奥底に眠っていた、はじめてのビートを高鳴らせる。

目覚めの夜。ふくらむ期待。きっと目には視えないから気体。

こんな時被害妄想は宿らない。理解できるようになったこの遺体。

今夜は何か私の中で変わる、そんな予感が横切る。

「シンジのゲストでミズキ+2で。」

ようやく着いたエントランスでミズキがスタッフにそう告げた。

その10秒後、音が肌に触れ出す。そして全身に弾かれ神経に激しく、心地良く伝わるのを確認した。これがトランス、、、。

研ぎ澄まされたバイブは、脈拍をリズムカルに駆け巡らせ、アンニュイな日常に浸っていた感情を刺激する。

ーはじまるよーって。

肌と聴覚から伝わったいくつもの音は、私の感情をいつしか包容していた。

独特なお香の匂いも漂ってる。DOOR を抜けてそこに在る空間が、盲目の私をもこんなにあたたかく歓迎してくれるんだって思った。

トーヤいわく、後は深く浸透して、集中した意識が陶酔してくのを待つのみ。

キメてない時は、音と体の動きをシンクロさせて、ナチュラルハイのテンションに持ってく、だそうだ、、、ムズカシイ、、、。

でも愛しい音の世界がこんなにも素晴らしいんだってコト、久し振りに痛感した。いや、むしろはじめての音質。はじめての臨場感。はじめての世界。

私もサイコーの気分になれるだろうか。

「うわー、スゴイのばっか。見て見てアズサ、あの人、あっ、アレも！」

とにかく異色の人種と、妖しくも神々しいデコレーションや、ブラックライトのオブジェが目を惹くらしい。

「ねーミズキ、ココにいる人達って何てゆーんだろ？ウチら場違いっぽくない！？しかも変な匂いするし、やけに熱いし！」

アズサの不安を隠せない声が届く。

「たぶん RAVER だと想うよ。トランスを愛する人種。」

私は知ったかっぽく呟いた。トーヤの話からイメージするだけの情報を頼りに。でも私にはこの空間に彩られたトランス特有の世界観ってヤツが分からない。だから雰囲気呑み込まれたりもしない。

2人はかなり戸惑ってるようだ。どんな光景が広がってるんだろう。

まずファッションは？髪型は？客層は？

いくつもの疑問符を2人に投げ掛けると、帰って来た言葉は、

:イミフメイ: :リカイフノウ:だそうだ。

詳しく聞くと、宇宙人みたいな格好をしてる人もいれば、コスプレ、被り物をしてる人



もいる。あとアジアンテイストな民族衣装とか。お次は全身 TATTO に全身ピアスに全身蛍光色ヤロー。それからルミカを何本も振り回してたり、円盤みたいのを操ってるパフォーマーがいるそーだ。職業もみんな何やってる人なのか検討もつかないらしい。

—TRANCE TRIBE—、、、ますます分からない。

トランスと言う名のもとに集まった、個性と自由の集合体なんだろうか？

どーイメージを働かせよう？でも悩んでもしょうがない。その様を受け入れて、馴染ませてかないと楽しむモンも楽しめなくなる。目が視えない分、私は別に圧倒されるワケじゃないし。トーヤの言ってた、

:音が巡り逢う場所:

を私なりに、まずは発見しようと想った。

「あ、ねーミズキ、あそこでドリンク作ってんのシンジじゃない？」

アズサがシンジを見つけたみたい。私は導かれるままその方向へ歩み寄った。

ミズキがちょっとホッとした声で話しかけた。

「シンジハロハロー！今来たよー！」

「よーミズキ！今夜はスゲーよ！おっ、2人共久し振りー！」

私はナチュラルな笑顔を贈った。

「みんなトランスの PARTY はじめてっしょ。今夜の客7、8割はキマってる連中だからね。見てておもしろいと思うよ。でもちよいヒクかもね！まー楽しんで！何飲む？とりあえずショットいっとくか。」

そうシンジが言って、しばらくして私の手元にグラスが送られて来た。

「カンパーイ！」

バーカウンターに打ち付け、テキーラを一気に飲み干す。溢れ出た炭酸が指を濡らしたので軽く舐めた。40℃で喉がカーッと熱くなったトコで、タバコに火を付けた。

はっきり言ってシンジの顔はあまり思い出せない。

4年前海ではじめて逢ったあの日に、交通事故で目が視えなくなってしまったから、それはムリもない話なんだけど。

でもシンジのあたたかな優しさは視覚から得る情報以外でも充分伝わる。

「ユキオ、最近どう？」

カウンター越しに、シンジに肩を叩かれ耳もとで話しかけられた。

「相変わらず、、、かな。容態もずっと安定したままだよ。」

「そっか。オレも来週見舞い行こうかと思ってる。そん時よかったら一緒に行こうよ。」

「うん。モードジンよろしく！」

それからマリブコークを飲みながら、お酒のネタに周りの奇抜な RAVER 達を観察して、おかしく分析したり、その手のオシャベリをした後、「彩ちゃん、気をつけてね！」つと言うシンジの声に軽くうなずき、ミズキとアズサと一緒にフロアに向かった。

低音が激しくお腹に響く。私が音に近づくと感じる感覚より、音が私に迫って来る。でもレーザーみたいな高音も聴きとれる。歩きながらそっちの音に意識を集中させると、何とも軽快なメロディーラインで、そんなに低音が苦じゃなくなる。

ほんわか来た感じなのかな。きっとトーヤが好きな、サイケデリックトランスと言うジャンルなのだろう。相当混み合ってるらしく、いくつもの障害物が私を遮り、足が止まった。

はぐれないように、ミズキの手を強く握り返す。

「これ以上は、人多すぎて、前、進めないよー！」

3回目で聴きとれた。

スピーカー前まで連れてってと、何とかお願いした。

しばらくして、ようやく音が放出される真正面に辿り着いた。

杖をスピーカーの横に立て掛ける。そして音の世界へ。

音と体のリズム融合をしようとする、攻撃的な音の衝撃に負けそうになる。

高音を捕まえて、しなやかなイメージで横揺れするだけしか出来ない。

そのうち揺れが音と共に激しくなったり、緩やかになったりするからワケが分からなくなる。首、肩、腰、足をビートに乗っけて自在に操るなんて器用なコトもムリだし、ただ浮遊してく私と向き逢うのがやっと。

フロアの妖しい熱が伝われば、後はイメージの域に達した体をリアルに委ねるだけなのに、思考が覚束なくなって来てヤバイけど、たまらない感じだ。

そしてしばらくするとアルコールとMMが粘着したり、意識にちょっかい出したり、自然に汗と一緒に溢れ出て行くのがわかるようになる。

::この感覚::

今と言うかけがえのない時間は、自分が障害者だってコト忘れさせてくれるのかも知れないと思った。

私は周りで踊ってる RAVER と何ら変わらないんだ。この空間は私に平等と快感を与えてくれる。音に刺激された胃の内側が、振動する度私を未知の空間へ導く。ユキオの病室とはまた全然違った雰囲気的空間だけど、ココも居心地イイ。端から見ても、自分の世界に入ってる踊り好きな女の子がいるな、程度で他人は誰もが皆、私が盲目だって気づかないんだろう。

別にそんなのになんてコンプレックスも沸かないし、カンケーないけど気分がイイし、素直になれる。自分を表現できる。ココにいと、。。。

私は恍惚感や高揚感ってきつとこーゆー時に得られるんだって実感する。それと、私の体は死んでないってゆーのも確認する。その確認するって認識もどーでもいーくらい、音にハマってたいと、混沌とした意識を優先する。

宗教チック？音に支配されてく、。。。

いつしか3D へと変化を遂げた音は、柔軟な体じゃないと付いて行けなくなる。時折、隣で踊ってる人の腕や肩がぶつかるから、フロアもきつともうあたたまってると頃なんだろう。喉が乾いた。

より一層盛り上がりを見せる音の洪水は私を違う意味で潤してくれるけど、ミネラルウォーターが欲しくなってしまう。

その時、私のほんの少し、右斜上で集合した4つの音が、絡まりながら、遥か何百メートルにも感じるくらいの場所で、軌跡をほのかに残したまま上昇した。まるで勢いのある巨大な掃除機を ON にして、吸い込まれるかのように。

そして音はフェイドアウトして辺りが静寂を纏う。意識も宙に放り出されたままで。自然と両手を伸ばし、天を仰いでる自分に気づいた。

瞬間、デジタルの渦が巻き起こるのを察知したその次の過程で、私は音の急降下に潰され、リバウンドするように弾かれた！

周りの歓喜の雄叫びが聴覚に響き渡る。

何か降りて来たような神秘的な感覚に酔いしれて、低音と体の流動的なコラボレーションを計る。

そこから放出された目に視えない伝わりは、私の鼓動に届いた。

その鼓動は刺激を活性化させ、脳からの命令に純粹に従う。

いつしか私は夢中で操られるまま、時間軸の真ん中で肢体を躍動させるひとつの点に変わる。そして音と言う、いくつもの線をたどって浮遊するイメージを生み出す。日常

では手に入らないイメージにどうにかなりながら、更に高揚してく感受性は高まる。

「サイコーだね！」

ミズキが話しかけて来て私は自分の世界から戻る。

笑顔で me to! を贈り、また内側に向けられたベクトルと呼応する。

閉ざされた視界の中だからこそ得られる経験は素晴らしいけど、普通の人は目を開ければ元に戻る。

でも私の場合は、それをこの先ずっと閉じ込めておくことができる。

ささいなコトかもしれないけど、今の私にはそんな感覚が何より自分の存在を肯定できる数少ない手段のひとつなんだと想った、、、。

踊り疲れた後、ディタモーニを2杯飲んでやっと落ち着いた。

私達がフロアから出ても、音の洪水はありふれたテトラポットなんか簡単に呑み込むような勢いで、デジタルな津波を絶えず繰り返してる。

「ねーさっきの DJ 良かったねー！」

「私も超テンション上がった！ね、誰だっけ？フライヤーある？」

「さっきマワしてたヤツさー、最近ここいらじゃケッコー有名なんだよ。確かにプレイも選曲もウマいんだけど、実はもうひとつ、あいつには話題性になるネタがあんだ。」

「何ネタって！？」

私は3人のトークを、さっきの余韻にペネトレイトしながらボーッと聴いてた。ニュアンス的にはウマイって表現より、妙にノスタルジックって感じの方が強い。

あの感覚を伝えてくれた DJ のその雰囲気、独特の存在感が私の興味心を、オブラートで軽く包んだ程度だけど支配した。

「実際見ればわかるよ。ホラ、ウワサをすれば。」

シンジが親指を向けたんだろう。ミズキとアズサの視線が一斉に同じ方向に注がれた。

2人を取り巻く空気が変わった。

何だかさっきよりも鋭いつゆーか、動揺？とにかく感じが違うのが手にとるようにわかった。それが何か知りたくてどうしたの？と、ミズキの背中をチョンとつついた。

「車椅子ー」

、、えっ！？、、

ミズキが呟いた直後、私はそれよりも更に大きな声を上げた。それと同時にまっさきにあの人物像をイメージした。

「そう、あいつは車椅子 DJ。名前が一」

「トーヤ、、、。」

私は頭にあった言葉をそのまま口に出してた。

「彩ちゃん知ってんの？」

3人の視線が今度は、私に向けられたのを感じながらうなずいた。

「えー、ちょっと彩どこでー!？」

「あ、ねえこっち来るよ。」

私の鼓動が急激にスピードを上げた。なぜ？とマサカがいつぺんに思考に降り注ぐ。トーヤが目の前まで迫って来てるのが感覚でわかった。

「よう彩！タバコ1本ちょうだい。」

悪戯だけどもことなく優しい口調をぶつけられ、何だか知らずに入ってた肩の力が抜けた。きっとまた逢えたから、私は微笑みながらトーヤにタバコを差し出した、、、。

それから吹き抜けで、アンビエントが流れている外のフロアにトーヤとふたりで少し休んだ。中の熱気に比べると、ここは夜風も心地良く頬をくすぐり、音に耳を傾けると、粘着した意識が絡まった糸を解くように、緩やかに分離されてく。酔いしれるって言葉がハマる状況に導かれるまま、音の伝わりとシンクロしながら大きく首を後ろにもたれ、見えない夜空を仰いだ。

「冷たい！」

淡い恍惚とほのかな脱力感に浸ってた私は、額に冷たい感触を覚えハッと体を起こした。

「エビアン飲む？」

笑った声が私に向けられ、2、3口飲み干すとさっきより温度変化があったせいか、お腹に妙な異物感を感じて、軽く息を吐いて呼吸を整えた。それと同時にトーヤに偶然こんなトコで再会した実感もこみ上げて来た。

偶然？と訪ねるトーヤにいきさつを話すと、

「何だ、オレのコト調べて PARTY に来てくれたのかと思った。」

と、ちょっとがっかりした口調で言った。その後唐突に

「ねえ彩、今夜は満月だよ。」

と続けると、タイのパンガンで FULLMOONPARTY に行って、飛び入りで参加して廻した、リスペクトする DJ の先輩のヒッピー話をしてくれた。

私は流れて来る音と、トーヤの会話を二重音声で聴いてる内に、いつしか行ったこ

とも無いパンガンの自然の揺らぎの中で、自分が風を纏って踊ってるイメージに抱かれ、陶酔のゾーンを築いてた。トーヤの言葉は心を撫でるようにメロウに振動し、時には意志を持った律動へと滑らかに移行しながら、アンビエントと重なり逢う。いつの間にか反応する色々な言葉と言う生き物に私は敏感になり、トーヤと無垢なキャッチボールを交わしていた……。

二〇〇〇年 執筆

生澤由一